

物理
化学

DDS

企業

博士課程(留学)

大学研究員

起業・大学教員

世界に通じる唯一無二の研究をし、オンリーワンをめざす -研究者にしか味わえない醍醐味-

山口葉子 (株式会社ナノエッグ 代表取締役社長、聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター 准教授)

仕事の内容とやりがい

肌の細胞は、細胞分裂後、分化すなわち変身をし、そして死を迎える(すなわち垢です)という生涯を繰り返して行い、皮膚という最大面積の臓器を構築しています。皮膚からは容易にモノは入り込めず、水さえもそう簡単ではありません。このように守りが強固な皮膚から、何とか薬剤を入れたくて研究を日々進めています。針を使うという安易な方法に逃げずに(笑)、『塗ったり貼ったりするだけで何とか薬が入られないか』という難題にチャレンジすることは、本当に楽しくやりがいのある仕事で、幸せを感じます。

仕事と生活のバランス

なんでもチャレンジしたい性格なので、後先考えず結婚して、そして子どもを産んでみたくなり、結果2人の子ども達(現在高校1年の長女と小5の長男)に恵まれました。主人は、なんでも良く手伝ってくれますので家事を分担してくれています。子どもが大好きな夫のおかげで、子育ては主人中心で回っていますので、出張で出かけても何の問題もありません。週末は出来る限り食事は手作りにして『ママの味』を覚えてもらうようにし、電化製品や便利グッズをフル活用して、家族と過ごす時間を作るようにしています。

進路決定のきっかけ

高校2年の時、理系か、文系か選択する際、文系の科目、特に古典・漢文、世界史が苦手だったことから考える科目が多い理系に進むことにしました。その中でも、かっこいいからという理由だけで漠然と白衣を着る仕事に就きたいなあと考えるようになりました。大学は合成化学に進んだのですが、大学院修士課程で巡り合った教授に、『お前の手は研究者の手だな』と言われたのをきっかけに、研究者になることを決めてしまいました。しかし、大学院時代に研究の楽しさを知ってしまったのも事実です。

進路選択に対してのメッセージ

自分のこだわりや欲望に任せて進路を決めていました。大学時代あまりにも遊び過ぎたので(笑)、大学院に進んで勉強しようと思いましたが、その時に研究の醍醐味を知ってしまいました。その後企業に就職したのですが、やはり物事を掘り下げて考えてしまうため、開発よりも研究に向いていると勝手に信じてしまい、博士号を取るためにドイツ留学をしました。その後は、研究者になるというステータスにこだわり続け、ポスドクをし、現在に至ります。自分の道を決めるのは、『信じたことへのこだわり』だと思います。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

大学院を卒業して外資系企業に就職したのですが、開発の仕事をするにつれて『この現象はなぜなんだろう』と基礎化学にこだわってしまう自分を目の当たりにして、博士号を取得しなくなりました。しかし、苦勞をするならば国内ではなく海外で勉強してみようと考え、多くの方が留学する米国ではなく敢えてドイツを選びました。おかげで本当に大変な3年間でしたが、英語とドイツ語が習得でき、国内では得られない広い視野で物事を考えることが出来るようになりました。この時の経験が現在の仕事に大きく貢献しています。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

ドイツの大学院の女性比率は、日本とほぼ同じくらいであると思います。もちろん学科によっても異なると思いますが、私が所属していた研究室はほぼ4割が女性でした。しかし、実際に学位取得後に研究者の道を進む割合は10%程度ではないかと思っています。この点も日本に近く、結婚して仕事をやめてしまう場合や、研究とは異なる職場で働く選択をする場合などが多いように思います。もちろん文化や生活習慣の違いもありますが、日本とドイツは非常に類似しているように感じました。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

外資系企業に勤めていた際に、研究のため東京理科大学に出向していた時期がありました。その時にお世話になった教授にドイツの研究室をご推薦いただきました。外資系に勤めていたにも関わらず英語がさっぱりしゃべれなかったので、自分への戒めとして海外に行って高いハードルを越えることを決意しました。まずはドイツに行く前に、イギリスに約2カ月間語学留学をし、多少英語がしゃべれるようになってから、約2年半、ドイツバイロイト大学の界面化学を研究しているHoffmann先生の研究室に所属しました。

滞在先の思い出・生活者としての体験

博士号取得のためドイツバイロイト大学に約3年間留学しました。最初の1年間は、言葉の問題(ドイツの大学生のほぼ100%が英語を話せる)に苦しみ、なかなか打ち解けなかったこともあり寂しい思い(泣)をしました。しかし2年目以降は、BBQしたりバーに飲みに行ったり教授の悪口を言ったり(笑)など、研究室の仲間(外国人のお客様ではなく)として研究を進めることが出来ました。ドイツ人は朝早くから仕事を始め夕方4時には終わり、金曜は昼までしか仕事をしませんが、研究先進国としての位置を維持出来ているのは、メリハリのある仕事体制にあると思います。見習いたいですね。

<山口葉子(やまぐちようこ)プロフィール>

1981年 静岡県立韭山高等学校卒業
 1986年 静岡大学工学部合成化学科卒業
 1988年 静岡大学大学院工学研究科合成化学専攻修士課程修了
 1988年 ダウコーニング株式会社(現東レ・ダウコーニング株式会社)入社
 1991年 結婚
 1992年 同 退社
 ドイツバイロイト大学自然科学群博士課程入学
 1995年 長女 9月に出生(ドイツから一旦日本に帰国し出生、出産後3カ月でドイツに1人で戻る)
 Ph.D.取得
 横浜国立大学大学院物質工学研究科 博士研究員及び非常勤講師
 1998年 オーストリアグラーツ大学理学部物理学科 客員研究員
 2000年 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター-DDS研究室 研究員
 長男 9月に出生(転職後約5カ月で出生し、3カ月後に復帰)
 2006年 株式会社ナノエッグ設立、代表取締役社長に就任
 株式会社ナノエッグ設立、代表取締役社長に就任
 2008年 聖マリアンナ医科大学難病治療研究センター-DDS研究室 助教
 同 准教授

